

—— コロナ禍のなかで・・・ ——

静岡福井県人会 会長 武長 敏彦

会員の皆さんこんにちは。暫くぶりですが会報をお届けさせて頂きました。1年もの長い間、音信不通のような状態になってしまいまして誠に恐縮です。連日テレビのトップニュースに扱われている新型コロナウイルス菌の感染が全国で拡大しており、なを更に特異な変異株と称される悪性で、しかもより感染力の強いウイルス菌の猛威に翻弄されている現況であります。会員の皆さんにはこのようなコロナ禍のなかでも日々予防対策や行動の自粛などに細心の注意をされ、お変わりなくお元気でお過ごしのことと拝察致しております。急がれている予防接種も、高齢者向けの1回目の接種がようやく始まったばかりで、この先若い人達にまで終えるには、いったい何時ごろになるのやら?・・・と、手際の悪さに気をもむばかりであります。

私達の県人会でも今日のコロナ禍のなかでは何事も出来なく、全くの休会状態となっておりますが、会報だけは少なくとも年1回、何としても皆さんにお届けしなければならないと思っております。

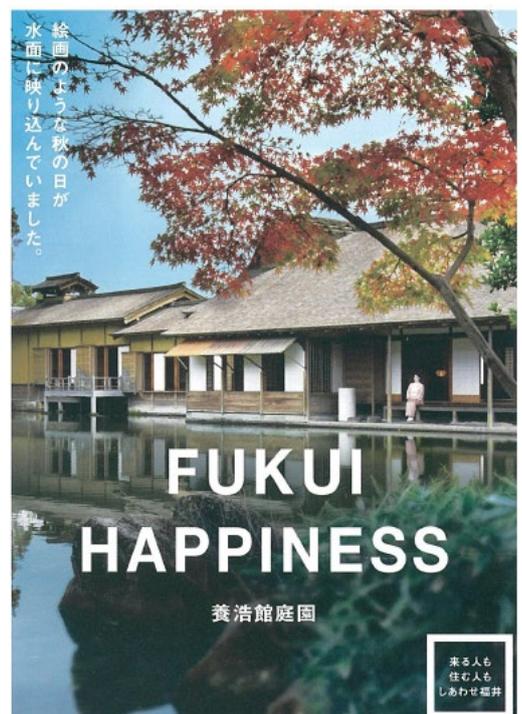
今回の会報の内容は、故郷福井の新聞や、広報の中からニュース、情報、歴史などを選び出して載せることに致しました。今日コロナ禍のなかではありますが、ふとひと時、故郷への郷愁にかられることも宜しかろうと思ひ、会報にまとめましたので、往時を思い起こしながら目を通して下されば幸いに思います。

以上

養浩館庭園のすばらしさ

わが故郷、福井県の福井市にある国の名勝、養浩館庭園が米国の日本庭園専門誌による2020年ランキングで8位に選ばれた。約千ヶ所の対象から14年連続で10位内をキープしている。実に誇るべきことである。

「往時の姿を妥協せずに再現した数寄屋造りの建物が素晴らしい」と評価されたのである。その優美な姿を維持するため、今こけらぶき屋根のふき替え工事が行われている。ふき替えは12年ぶりである。こけらぶきとは？木の薄板を幾重にも重ねる日本独特の屋根ぶき技術の一つ。現存文化財の多くで用いられている。養浩館では手割りした厚さ3ミリ、長さ約30センチの杉板を3.6センチずつずらし、1枚ずつ竹く



ぎで留めていく。

板と板の間のすき間が通気性を良くし、建物の耐久性を高めるという。建物全体では、約10万枚もの板が使われる。屋根の場所によって板を使い分け、傾斜にも気を配る。「軽くふんわりとした仕上がりにするのが職人の腕の見せどころ」と言われている。板材や竹くぎは製作する専門業者があり、職人が工事を担うことになるという。

元は福井藩主の別邸だった同庭園は、今は市民、県民の財産。技法を伝承しつつ、いつまでも大切にしたい。

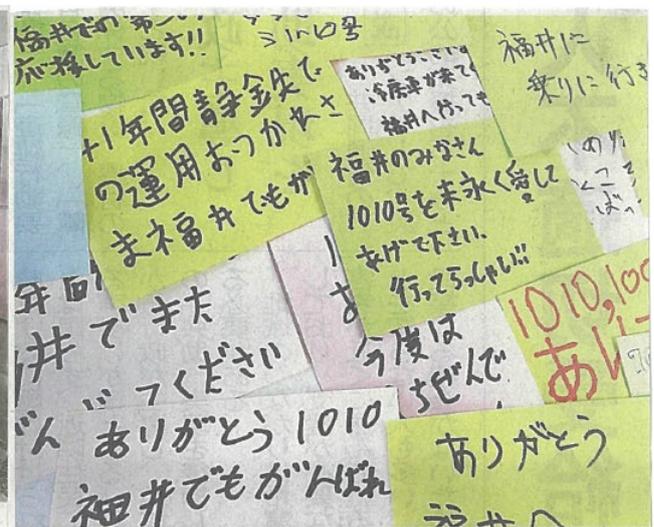
—— 福井新聞の記事より ——

ファン「福井でもがんばれ」

えち鉄へ譲渡 「1010号」静岡ラストラン



鉄道ファンらが大勢訪れた1010号のラストラン＝6日、静岡市の新静岡駅



1010号の福井での活躍を願うメッセージ

えちぜん鉄道(本社福井市)に譲渡される静岡鉄道(本社静岡市)の車両「1010号」が3月6日、地元静岡での運行を終えた。新静岡駅には大勢の鉄道ファンらが訪れ、新天地福井での活躍を願うメッセージをカードに書き込んでいた。午後1時5分、新静岡駅発袖木行きがラストランとなっていた。駅のホームでは、沿線住民や鉄道ファンがカメラやスマホで撮影するなどして別れを惜しんだ。「ありがとう1010号、えちぜん鉄道でもがんばって」と書いた手作りのボードを掲げる子供の姿も見られ、またメッセージでは「福井の皆さん、末永く愛してあげて」「福井に乗りに行きます」などと書き込んでいた。

「1010号」は、静岡清水線で40年以上にわたって親しまれてきた。譲り受けるえちぜん鉄道では「1010号」を改造し、2023年の夏に予定している県立恐竜博物館(勝山市)のリニューアルに合わせて勝山永平寺線で開始の予定だ。全国の恐竜ファンを目的地に運ぶだけでなく、乗車すること自体が旅の目的となるよう、新たな観光資源として地域活性化のシンボルにしたい。同社の豊北社長は「全国の子ども達が恐竜博物館に向かう道中からワクワク感を楽しめるよう、車両の内外装をきょうりゅう電車にふさわしい大胆なデザインや、模型を置いたり様々な工夫を凝らしたい」と語る。全国の恐竜ファンを博物館に運ぶための観光列車としての付加価値を高め、新たな観光資源にしたいと目論んでいる。

—— 福井新聞の記事より ——

「福井の人は特別」・・・と感謝

東日本大震災で津波から生還、あわらに移住して

2011年3月11日午後2時46分。和平(わだいら)實さん(86)、陽子さん(85)夫妻が居間でテレビを見ていると一瞬、ぐらぐら揺れた。何秒かあとに猛烈な揺れに襲われ、30秒以上続いた。高さ2メートル近い置き時計やテレビ、食器、飾り棚のガラス・・・。目に見えるもの全部バラバラになった。和平さん夫妻は、宮城県石巻市で骨董店を営んでいた。この日は海岸線から400メートル程の場所にある自宅にいた。津波の到来を知り、いっちは車で逃げた。ただ、何も持たずに出てしまった為に財布などを取りに自宅へ戻った。家に入ろうとしたその時、高さ6メートルの防波堤を越えて津波が迫ってくるのが見えた。「住宅地の道路を走ってきた津波は黒く、馬の背中を見るような感じだった」・・・と。慌てて戻って車に乗り込んだ瞬間、真っ黒な水の壁にのみ込まれた。車は1階の屋根の高さまで浮き上がり、ぐるぐる回った。



水が徐々に車内に入り、胸の辺りまで漬かり、流される車の中で2人が言い合った。「あきらめよう。死ぬかもしれねーぞ」一。奇跡が起きた。流されずに残っていたがれきにぶつかり、車が止まった。ドアの内側にあった車の工具でガラスを割り、脱出した。陽子さんを助け出すと車は間もなく沈んでいった。

被災後、半年近く避難所生活が続いた。電気は1ヶ月以上復旧せず、一斗缶をトイレ代わりにした。避難直後の食事は朝晩2食で、パンの切れ端などで空腹をごまかした。特に辛かったのは人の目。避難所は仕切りが無く、どこを見ても人の顔。これが毎日24時間続いた・・・と当時の状況を語る。

石巻市内で家を探したが見つからず、あわら市に住む陽子さんの知人に電話したところ、空き家があることを聞いた。直ぐに見に行き、即決した。7月に、骨を埋めるつもりであわら市にやってきた。死を覚悟したあれから10年、あわら市に移り住み、被災後は想像できなかった笑顔の日々が今はある・・・と夫妻は言う。移り住んでから2人は毎朝、1時間ほど散歩するようになった。最初は近所の人とすれ違っても挨拶を交わす程度。1年ほどすると立ち止まって話すようになった。實さんがマージャンが趣味だと話すと、直ぐに10人ほどが集まり仲間入りとなった。陽子さんは近所の人に「カフェ」にと誘われるとその仲間が笑顔ですっと受け入れてくれた。避難当初は、箸一膳すらなかったが、生活用品や家電製品など、数々の善意の提供を受けた。「福井の人の温かさは特別だね。柔らかい。他の県だったらこんな生活はなかった」・・・と振り返り、「隣近所の皆さんの温かい支えを受けて10年を迎えられた。これからも静かに、明るく生きて行きたいね」・・・と語る。和平さん夫妻は、穏やかな毎日を送っている。

—— 福井新聞の記事より ——

2月7日は福井県のふるさとの日で、この県名が誕生した日であり ますが、その由来を皆さんご存知でしたか？

明治14年(1881年)2月7日は、福井県が新設されたのを記念して制定され、今年
は置県140年に当たる。

明治4年に廃藩置県が行われた時から10年の間には様々な確執があった。
全国的にも稀な県域や県名の変更が繰り返され、一時期ではあるが福井の名前が消えたこ
とや、福井も含めて敦賀県となり、県庁も敦賀に移ったこともあった・・・という。
この10年間の経緯について述べると、廃藩となる以前は若越の2州には、福井藩、丸岡
藩、大野藩、勝山藩、鯖江藩、鞠山(まるやま)藩、と若狭地方の小浜藩の7藩があった。
廃藩後の各藩はそれぞれ県制を敷き、郡による区分けとして中、北部の坂井郡、吉田郡、
丹生郡、足羽郡、大野郡の5郡をもって福井県とし、南部の今立郡、南条郡、敦賀郡と若
狭の三方郡、遠敷郡、大飯郡の6郡をもって敦賀県とした。その後、福井県はすぐに足羽
県と名を変えた。2年後には両県が合して敦賀県となった。更に3年後には、木の芽山嶺
を境として、嶺北一帯と石川も合して石川県と、嶺南一帯と滋賀も合して滋賀県に分割さ
れた。滋賀県政は平穏だったが、石川県政は一躍日本最大の人口182万人の県となり、
それが為地域間の抗争が長く続くことになった。こうした10年間の紆余曲折がようやく
にして、最終的には現在の境域が確立したのが明治14年で、今日の福井県の誕生となっ
たのである。この頃、県の責任者を県令(今日の知事)と呼んでいた。

初代の県令は、石黒 務であった。福井県の置県1周年に当たり旧福井藩主の松平春嶽公
は、石黒県令への書簡で置県の喜びを「置県の幸福は、越前の海の深さも、白山の高さも
及ばず」と表現したと言う。

—— 福井新聞の記事を参照して ——

福井県の名産品の一つ、若狭塗りの箸について “折れたバットを箸に利用”

福井県小浜市内にある若狭塗り箸の専門店、「兵左衛門」は、プロ野球や社会人野球な
どで選手が使って折れたり、破損したりしたバットや、バットを作る際に出る端材などを
再利用して箸を作る取り組みをしていると言う。

2002年から「かっとばし!!」というユニークな商品名で販売を始め、売り上げが年
間8万膳にも達している。

都内渋谷にある広尾店、営業部の細井 聡さんは「プロ野球の開幕になると毎年問い合わせ
が増えますが、最近では再利用していることが脚光を浴び、時代に求められている感じ
がします」と話している。

バットは、堅さと適度なしなりを兼ね備えており、箸に適した素材だが、加工や細工に
手間がかかる為、1膳を作るのに最低3ヶ月かかると言う。

また、バットのグリップなど、箸に使えない部分は、箸置きや靴ベラ、印鑑、ボールペ
ンなどに加工して、少しでも無駄が無いようにしていると言う。

—— 福井新聞の記事を抜粋して ——

渋沢 栄一が晩年に語ったことは？

「90歳までは、十分身体、能力共に用いられる」「少なくとも90歳ぐらいまでは、おじいさん扱いにしないことが必要」— 晩年こう語っていたのは、NHK大河ドラマの主人公渋沢栄一である。91歳で亡くなるまで幅広く社会貢献に尽力した。1929(昭和4)年、渋沢が90歳の頃に、元福井藩主松平春嶽の三男慶民(よしたみ)が面会した。春嶽が亡くなった時はまだ9歳で、渋沢に父の話を知りたいと思い立った。相談した勝山市出身の歴史学者平泉澄の紹介で東京飛鳥山の渋沢邸を訪れ、別邸での会談が実現した。若き日の渋沢が仕えた一橋慶喜は春嶽が支え、双方親しい間柄だった。

「主客いずれも、まことに上機嫌で、楽しい懐旧談に花が咲いた」と、平泉は語った。渋沢は還暦を迎えた時、人間は年を取ると筋骨は衰えるが知恵が働き、経験が増す。学問は学校で終わりではなく、人の寿命と共にいつまでも存続すべきものである・・・と。晩年まで知的活動に励んだのはさすがである。

「人生100年時代」といわれる現代、年を重ねても学問にいそしむ人は少なくない。道標となる人物の存在に勇気づけられよう。

—— 福井新聞の記事より ——

福井県の名産品の一つ「漆器」について

11月13日は「うるしの日」で、鯖江市片山町に漆器神社があり、昨年9月に鎮座800年の記念式典が盛大に催された。

当日は、手動ろくろで生地削りの実演があり、おわん形の記念碑も披露された。漆器の由来は古く、平安時代に惟喬(これたか)親王が京都・嵐山の法輪寺へ参籠し、満願のこの日に漆の製法と漆塗りの技法を菩薩から伝授されたという伝説が基になっている。漆は熱や酸に強く丈夫な上、塗ると美しい。古代から多様な製品に用いられてきた。製品を作るには多くの工程があり、高度な技術が受け継がれてきた。だが、いま産地は苦境にある。新型コロナの影響で、注文がぱたりと止まった。鯖江市河和田地区でも売り上げが大幅に減り、存続が危ぶまれる工房も少なくないと言う。

この危機に、地域おこし協力隊の女性と漆器職人が協力し、「腕チーム」を立ち上げ、様ざまなおわんを取り揃えて、その特色や魅力を発信したりして販売に力をいれている。

「こんな時だからこそ、ワンチームとなって頑張ろう」・・・と。

職人たちの熱い思いが伝わる。

健体康心

“幸せな家庭は、家族皆んなの健康から!”

お父さんの健康は———家の柱

お母さんの健康は———家の光

子供達の健康は ———家の希望

祖父母の健康は ———家の誇り

私達の平穏な暮らしの基本は、やはり一人一人が「健康」を保つということなのです・・・と。

その「健康」について、ちょっと拘ってみると、この言葉の語源は古代中国の「易経」と言う道徳律を教示する古書にある「健体康心」と言う言辞に由来する言葉なのです。言うまでもなく「健体」は「すこやかなカラダ」、「康心」は「やすらかで広く、喜びに満ちているココロ」を表している言葉なのです。

人は時として自己チューの狭い心から出るわがまま気まま、不平不満の元となる欲望の野放し、わが身忘れての八つ当たり・・・など。

日頃から「健体」と「康心」を養う努力を重ねることがとても大切なのです。

—— 福井新聞から一部を抜粋して ——

《付録》 雑感

今日のコロナ禍のなかにあって、感染予防の為に好天の時は、自転車で近在の神社仏閣、史跡巡りや、自然豊かな山里などへと気ままに足をはこんでいる。そんな折りや、街なかで見聞きしたことなどと、日ごろから新聞、雑誌などで 気づいたこと、感じたことなどをメモにしてあり、それを今回取りまとめ、付録として添付しました。

なかにはユニークな、またユーモラスものなどもありましたので、一読下されれば幸いです。

1. 「老害」を→「老甲斐」に

人生100年時代と言われ、現在シニアの割合は増え続けているなか、時に「老害」と言う言葉をよく耳にしますが、これは「老いを認識せずに周りに迷惑をかけたり、若手の人達の進路をジャマするような困った老人」に使われる言葉ですが、これを「老甲斐」の方向へと生き方(意識)を変えようと言うことでありますが、言葉の意味は「今まで生きてきた甲斐があった、良かった」と思える人生を目指すことであります。今まで培ってきた知恵や経験を、社会や周辺の人達に還元することが大切であり、これが正に「生甲斐」と言われるものです。これから先の人生をもっともっと楽しみたいものです。

2. おもしろい川柳を見イーつけた

- ①会社へ、来るなど上司、行けと妻
- ②出勤が、運動の為だと、気づく腹
- ③マスクでは、防ぎきれない、妻のグチ
- ④ハンコ不要、出社も不要、次はオレ？

3. 18歳と81歳の違いはなに？

- ①恋に溺れるのが18歳で、風呂で溺れるのが81歳
- ②道路を暴走するのが18歳で、逆走するのが81歳
- ③心がもろいのが18歳で、骨がもろいのが81歳
- ④自分でまだ何も知らないのが18歳で、やったことを何も覚えていないのが81歳
- ⑤自分探しの旅をするのが18歳で、出かけたまま帰り道がわからなくなるのが81歳

以上